洗足学園音楽大学
サクソフォーン・オーケストラ 《夏の演奏会》

2021年7月22日(木・祝) 15:30開場 16:00開演
会場:洗足学園 前田ホール　指揮:保科 洋

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催:洗足学園音楽大学・大学院

ご挨拶

本日はお忙しい中、第26期となります《サクソフォーン・オーケストラ夏の演奏会　2021》にご来場いただき誠にありがとうございます。

昨年は、新型ウイルスの影響により前期の催し事が全て中止となりましたが、本学におきましても感染拡大防止に努めながら、昨年度後期から成果発表の場を設けて参りました。
音大生にとりましてホールで演奏する事は、何よりも代えがたい貴重な経験となります。
またご来場頂きますお客様もホールキャパシティの3割程度を最大としておりますが、
「感動は舞台と観客との間にある」と偉大な音楽家の名言があります通り、このような最中にお客様にお運び頂きましたこと、重ねて御礼申し上げます。

さて、今回の演奏会は日本を代表する作曲家の保科 洋先生をお招きし、当団三度目の“保科　洋の世界”をお届け致します。保科先生から、「楽譜は作曲家からの白黒の手紙、色付けは演奏家の仕事」と作り手ならではのお言葉を頂戴し、同族楽器のオーケストラですが試行錯誤を重ね、今日まで励んで来ました。

コロナ禍により、厳しく限られた現状の中ですが、保科先生の音楽にかける情熱を学生たちがどのように受け止め現わせるか、最後までゆっくりお楽しみ頂けますと幸甚です。

洗足学園音楽大学サクソフォーン・オーケストラ責任者 教授 岩本 伸一

本日は「サクソフォーン・オーケストラ　夏の演奏会2021」にご来場頂きまして誠に有難う御座います。

コロナ禍であり、また連日の大雨の災害に心を痛める日々が続いておりますが、無事に本日の演奏会を迎えることができ、喜ばしく思っています。
未だコロナウイルスの収束の兆しが見えない状況ですが、前期の成果発表としまして洗足学園音楽大学サクソフォーンオーケストラらしい熱く迫力ある演奏を、メンバー一同心を込めお届けします。

最後に、開催にあたりご指導頂きました指揮者の保科 洋先生をはじめ、ご協力やご支援を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

学生代表　寺東 春美

Program

保科 洋／マーチ「きらめきのとき」

保科 洋／インテルメッツォ

A.リード／エル・カミーノ・レアル

保科 洋／復興

休憩

S.プロコフィエフ／バレエ組曲「ロメオとジュリエ ット」より

モンタギュー家とキャピュレット家

仮面

アンティーユの娘たちの踊り

タイボルトの死

ジュリエットの墓の前のロメオ

M.d.ファリャ／演奏会組曲「三角帽子」より

序曲

第1部より

午後

粉屋の女房の踊り(ファンタンゴ)

第2部より

隣人たちの踊り(セギディーリャ)

粉屋の踊り(ファルーカ)

終幕の踊り

【保科 洋 ／ マーチ「きらめきのとき」】

この曲は京都府大学吹奏楽連盟創立30周年を記念して作られ2004年5月に初演されたマーチである。京都・大学吹奏楽連盟は毎年合同演奏会を開催しており、それを支える役員をはじめ参加する演奏者全員が、いつ見てもまぶしく感じるほどみんな輝いていてこのような吹奏楽を愛している若い大学生をイメージして、タイトルを《きらめきのとき》と命名された。

内容的には明るく健康的なマーチで特別変わった部分はあまりないが、冒頭の軽快なメロディーから中間部Trioの流れるような優雅なメロディー、後半部分の最も賑わいをみせる場面など、どの場面を切り取っても曲名のとおり「きらめき」を感じられる作品である。しかしこの曲の「きらめき」はひとつではなくそれぞれの場面によって段々ときらめきは展開していき多様な性格の「きらめき」を感じることができる。全曲に亘って主旋律と対位旋律や打楽器、その他の要素とのバランスが重要なカギを握っている。

3年　松岡 梨帆

【保科 洋 ／ インテルメッツォ】

この曲は、全日本吹奏楽連盟の委嘱により、2017年度第65回全日本吹奏楽コンクールの課題曲Ⅲとして作曲された。保科洋氏による四度目の課題曲委嘱作品である。

メロディアスな旋律や美しい和音が印象的なこの曲は、「歌（音楽の原点）のある曲」を意図して作られており、個々のパートの難易度は高くないが、アンサンブルに工夫の必要となるように書かれている。

だんだんと下降してゆく和音と旋律、上昇音型による繊細な前奏で幕を開け、美しい旋律と対旋律の優美な絡み合いののち、ファンファーレ風のリズミックな主題が展開されていくが、一貫して管楽器のアンサンブルによるサウンドが特徴的で、他の合奏形態には無い、管楽器が主体であるからこその力強く、かつ繊細な美しさを感じさせる。

1987年の全日本吹奏楽コンクール課題曲である「風紋」と同じく、課題曲ではあるが未だに演奏会等で数多く取り上げられる、保科作品の不朽の名作の中の一つである。

2年　中原 雄太郎

【A.リード ／ エル・カミーノ・レアル】

この作品は吹奏楽界の巨匠アルフレッド・リードが1984年の後半から1985年初めにかけて作曲した吹奏楽曲。アルフレッド・リード(1921~2005)はアメリカの作曲家で，吹奏楽の世界では 20 世紀を 代表する作曲家の一人とされている。第二次世界大戦のころから最晩年まで作品を書き続け，おびただしい数の作品が残されている。ジョージア州ロビンズ空軍基地の第581空軍軍楽隊（現在の空軍予備役軍団軍楽隊）と指揮者のレイ・トウラー中佐の委嘱で1985年4月15日にフロリダ州サラソータで初演された。タイトルの「エル・カミーノ・レアル」とはスペイン語で「王の道」という意味でカリフォルニア州に実在する街道がありリードはここから作曲のヒントを得たと話している。

フラメンコのようなスパニッシュな雰囲気から始まり、中間部は哀愁に満ちた旋律で、悲しみは次第に大きな歌へと発展していく。後半部は舞曲が再現され、過去の悲しみを大きな喜びの中に包み、熱狂的にエンディングへ突き進む。オーソドックスな「速い・遅い・速い」の3部形式で曲の展開とないっている。

2年　加藤 恵莉菜

【保科 洋 ／ 復興】

この曲はヤマハ吹奏楽団創立50周年を記念して2009年に委嘱された作品である。2010年1月にサントリーホールで須川展也氏の指揮で初演された。この復興というタイトルはヤマハ吹奏楽団の50年の歴史と更なる未来への飛躍をイメージして命名されたものである。

この曲と2011年の東日本大震災は直接は関係してないが、震災をイメージして演奏する団体が多く存在する。冒頭の恐ろしさすら感じるゆったりとしたメロディーや後に出てくる隠れたモティーフなどが、震災の前のこれから起こることの不安さや前兆を感じさせる。またAllegroから始まる数々の激動的なフレーズが震災が起きた時の焦りや混沌さを感じさせる。後半のAndanteの明るくもどこか悲しみを含んだ壮大な場面から再び現れるAllegro部分では前半部とは違い明るくデフォルメされたフレーズが現れ、苦悩を抱えつつも前に向かっていく人々の希望を感じさせる。このようにして当時、復興と東日本大震災を照らし合わせ、全日本吹奏楽コンクールや、演奏会などで演奏する団体が増え、一躍有名となった作品である。

1年　近藤 空

【S.プロコフィエフ ／ バレエ組曲「ロメオとジュリエット」】

この作品は、ソ連の作曲家セルゲイ・プロコフィエフがシェイクスピアの代表作「ロミオとジュリエット」に基づいて作曲されたバレエ音楽である。
ロミオとジュリエットの舞台は14世紀のイタリア。代々対立関係にあったモンタギュー家の息子ロミオとキャピュレット家のジュリエットの禁断の恋の物語であるが、最後には、2人とも自殺してしまう悲劇となっている。

プロコフィエフは作曲当初、死者は踊ることができないという振付の問題から物語をハッピーエンドに書き換えた。1935年に全52曲が完成したが、音楽が踊りにくかったことや、ハッピーエンドの書き換えが批判され、バレエの初演はキャルセルになってしまった。そこでプロコフィエフは、2つの組曲に書き換え、国内外でヒットとなった。その後バレエの初演は1938年にチェコのブルノで行われ、ソ連での初演は1940年に行われた。それまでのバレエ音楽の多くは、踊りを引き立てるための伴奏のようなものだったが、ロミオとジュリエットの音楽は、物語の進行だけでなく登場人物の内面まで描き出しており、バレエの中の音楽の存在感を高めた作品として、20世紀に生まれた革新的なバレエ音楽とされている。

3年　岡本 真尋

【M.d.ファリャ ／ 演奏会組曲「三角帽子」】

『三角帽子』は、スペインの民話を題材にした短編小説『三角帽子』を元にしたバレエ音楽である。
作曲者はマヌエル・デ・ファリャ（1876-1946）。スペインに生まれ、アルゼンチンで70年の生涯を終えた。彼は20代で師事していたフェリーペ・ヘマドレルの影響で民族音楽に興味を持った。30代はパリに住み、ドビュッシーとも親交があった。1914年に第一次世界大戦が勃発し、祖国マドリードに帰国。そこで本日演奏する『三角帽子』を書いた。この曲は作曲者がフランスで学んだ印象主義音楽（情緒、物語性よりも気分や雰囲気に重きを置く様式）と、若い頃から興味を持っていたスペインの民族音楽とが融合されたものとなっている。

初演は1919年のロンドンで行われた。舞台・衣装デザインはパブロ・ピカソが務めた。
1919年は、パリ講和会議や五四運動、ワイマール憲法の制定など、世界情勢が目まぐるしく変化した年だ。曲

の舞台は1804年〜1808年のスペインのアンダルシア。主な登場人物は3人で、粉屋の優しい醜男ルーカス、彼をとても愛している絶世の美女フラスキータ（妻）、そしていつも大きな三角帽子を被っている代官である。三角帽子は権力の象徴であり、曲の題名にもなっている。好色な代官は妻帯者でありながら、フラスキータに恋をしてしまう。

第一幕は、晴れた日の午後。ルーカスの家に代官がフラスキータ目当てにお忍びで遊びに来る。フラスキータはひとりで代官をもてなし、代官をからかってわざと艶かしい踊り（粉屋の女房の踊り）を踊った。代官はその気になってフラスキータに言い寄るが、触ろうとした瞬間フラスキータに胸を突かれて転ばされてしまう。そこに葡萄棚に隠れていた夫ルーカスが出てきて代官をなぐり、代官は逃げ去る。

第二幕は、その日の夜。近所の人たちは祭りの踊り「セギディリア」（近所の人達の踊り）を踊っている。ルーカスも「ファルーカ」（粉屋の踊り）を踊り出す。激しい踊りが続く。そうするうちに、昼間の出来事で怒った代官が罠をしかけ、ルーカスは警察に捕まってしまう。その隙に代官はフラスキータを横取りしようと忍び寄る（代官の踊り）。しかし急いでいた代官は水車小屋の前の川に落ちる。代官はフラスキータに助けられ、そしてまた逃げられてしまう。代官は濡れた服を脱いでルーカスの布団に潜り込む。そこに警察から逃げ出してきたルーカスが戻ってくるが、代官の脱いだ服を見て自分の服と代官の服を交換し、代官の女房のところへむかう。代官はルーカスの服を着て外に出る。（終幕の踊り）そして今度は代官が警察と近所の人に袋叩きにされ、逃げていった。ここでこの物語は終わっている。

この曲は作曲当初は小編成オーケストラのために作られ、打楽器も使われていない。

本日は全体より序曲、第1幕より午後、粉屋の女房の踊り。第2幕より隣人たちの踊り、粉屋の踊り、終幕の踊りの6曲を抜粋して演奏する。

3年　福地 日向子

保科 洋(指揮)

1960年、東京芸術大学作曲科卒、卒業作品にてその年の第29回毎日音楽コンクール作曲部門(管弦楽)で第１位を受賞する。以後、本格的に作曲活動を始めるかたわら、東京音楽大学、愛知県立芸術大学、兵庫教育大学で教鞭をとり、2001年３月に兵庫教育大学を定年退職する。
作品は管弦楽曲、オペラ、吹奏楽曲、室内楽曲、合唱曲、ミュージカルなど幅広いが、特に吹奏楽曲では日本を代表する作曲家の一人として知られ、作品のいくつかはアメリカでも課題曲に登録されるなど世界各国で演奏されている。特に2008年11月にイタリーで開催された国際ホルンコンクールにおいて本選の必須課題曲に「巫女の舞」（ホルン協奏曲）が選ばれ、世界各国のホルン奏者によって熱演された。
指揮活動も「フィルハーモニックウィンズ浜松」や「シエナ・ウインドオーケストラ」をはじめ幅広く行っているが、特に、アマチュアを対象とした指導法はそのユニークな演奏解釈理論とともに定評があり、岡山大学交響楽団の常任指揮者を50年以上もの長きに亘って続け、日本有数の大学オーケストラに育て上げるかたわら、客演指揮者としても全国各地のオーケストラや吹奏楽団体で活躍している。
2017年からは、保科洋指揮法クリニックを兵庫県加東市で主催し、全国のスクールバンドや市民音楽団体指揮者にアマチュア演奏団体を指揮するための指揮法の指導を行っている。
このような長年にわたる教育・指導活動が評価されて、平成27年度秋の叙勲において「瑞宝中綬章」が授与された。また、平成28年度春には兵庫県文化功労賞を授与された。
2017年に脳出血を発症し左半身麻痺という大病を患ったが、奇跡的な復活を果たし、現在は講習会や演奏活動を再開している。

兵庫教育大学名誉教授，　浜松アクト音楽院吹奏楽部門音楽監督、フィルハーモニックウィンズ浜松音楽監督

洗足学園音楽大学 サクソフォーン・オーケストラ

1995年、我が国でいち早く合奏授業に取り入れられた、サクソフォーンと打楽器から成る同族楽器のオーケストラ。ソプリロ（ソプラノサクソフォーンの１オクターヴ上の音域）からコントラバスまで、8種のサクソフォーンが使用されている。主に本学主催の成果発表会で保科 洋、秋山和慶、増井信貴、松尾葉子、現田茂夫、梅田俊明、大井剛史、海老原 光、ヤン・バンデルロースト、国内外の著名な指揮者を迎え、管弦楽作品を中心に演奏会を行っている。また東京芸術劇場、横浜みなとみらいホール、ミューザ川崎シンフォニーホールや、国内最大級の音楽祭、ラ・フォル・ジュルネオ・ジャポンに参加するなど活発に活動している。2010年11月にはサクソフォーン誕生の地であるディナン（ベルギー）を訪問、ストラスブール（フランス）では交流演奏会を行い、大成功を収めた。サクソフォーンならではの繊細かつダイナミックなサウンドを有するこれからの新たな演奏形態として注目され、高い評価を得ている。
　これまでオリジナル作品として、長生　淳「翼をひろげて」、ピーター・グレイアム「宇宙戦争」、石毛里佳「ブラキスカ」,鈴木純明「キリエ4.5」各氏に委嘱し、このオーケストラの魅力を世界中に発信する。
　2012年イギリスよりP.グレイアム氏を迎えて「宇宙戦争」、2014年アドルフサックス生誕200年を記念して「アドルフ200」、2016年日本を代表する作曲家保科　洋氏との夢の共演「復興」を(株)フロレスタンよりリリースされ、好評を博している

Member

Concertmaster	(学4)	三橋 正長	倉元 明宏				
Sopranino	(学4)	倉元 明宏	(学3)清水 建吾	(学2)中原 雄太郎			
Soprano	(学4)	今川 萌	角谷 澪	藤堂 紗也			
	(学3)	中條 花音	伊藤 輝瞳	寺東 春美	矢澤 亘		
	(学2)	石田 真彩	加藤 恵莉菜	楠本 夢菜	八木 寛菜	山崎 遼介	
	(学1)	新井 琴乃	伊藤 有莉愛	加藤 裕貴	熊木 萌奏		
		泉波 陽美	髙矢 真優	寺尾 作蔵			
Alto	(学4)	中崎 美羽	古梶 萌香	本間 珠里	本間 美桜		
	(学3)	伊東 玲美	岩城 玄仁	加藤 舜理	長谷川 愛美	松岡 梨帆	
	(学2)	大幸 拓未	亀澤 咲葵	小林 磨弥	佐藤 零	渋谷 瑛奈	永吉 すず音
		ZHANG XIAOHAN♭					
	(学1)	阿部 友花	新井 楓花	木佐木 桃花	北島 実幸	QIU QI	平野 未紗
		吉川 佳希					
Tenor	(学4)	片岡 夏望	加福 夏子	黒澤 望愛	齋田 明日香	辻 水紀	長谷川 莉子
	(学3)	岸本 楓	岡本 真尋	兼田 柊子	川口 華菜	福地 日向子	
	(学2)	阿部 未来	志賀 友香	下藤 香花	高橋 沙綾		
	(学1)	植木 里花	緒方 柊	金丸 璃奈	WEI QIXIAN	桑原 尚紀	山岸 芽以
Baritone	(学4)	鹿島 理功	山口 紗弥季				
	(学3)	重井 拓人	岡本 彩花	久米 愛海	北岡 舞帆	酒井 優希	薮井 美羽
	(学2)	大澤 茉依	鈴木 智尋	鈴木 ましろ	竹内 勇人	吉田 勇雅	
	(学1)	石川 堅大	川崎 俊裕	近藤 空	坂地 迅斗	冊田 大也	新田 乙葉
Bass	(学4)	船木 彩香	(学2)齊藤 渓太	(学1)駒田 雅乃	坂井 開	吉田 朋諒	
Contrabass	(学2)	中瀬 凱大					
Percussion	(学4)	池本 羽奈					
	(学3)	榎本 耀	杉本 裕香	前田 伶弥	村上 愛佳	加藤 海夏太	
	(学2)	阿南 杏佳	山野 智広	YANG YIDA♭	江口 和輝		
Harp		熊倉 実里♪					
Piano / Celesta		西村 京一郎♪	富樫 桃子♯				

♪…演奏補助 ♯…賛助 ♭…オンライン受講生

企画運営責任者	岩本 伸一				
指導教員	大貫 比佐志	貝沼 拓実	齊藤 健太	田中 拓也	本堂 誠
	小川 佳津子	山田 徹			
アカデミックコーディネーター		萩庭 光			
助手	北野原 由依				